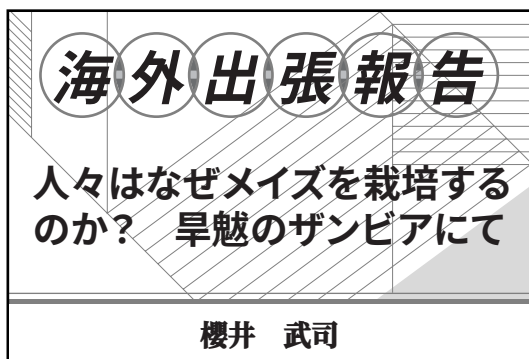




本誌 16 号で既報のように、私は 2004 年 12 月に南部アフリカのザンビアを訪問した。その記事の中で、ザンビアの農耕季節の始まりに触れた。しかしその後、実は雨が十分に降らなかったのである。12 月の段階では予想できないことであったが、2004/05 年は 1991/92 年以来の旱魃年となった。今回（2005 年 11 月）の出張は、新たな作付け期を迎えたザンビアで、前年の旱魃がどのような影響を及ぼしているかを調査することが目的である。そして、その成果に基づき、「レジリアンス研究会」が 2006 年度に総合地球環境学研究所の本プロジェクトに昇格できるよう、プロポーザルを作成するという課題がある。

旱魃の被害の最も大きかった南部州を訪れた。ザンビアの南部、ジンバブエと国境を接する州である。首都のルサカから幹線道路を南西部の中核都市リビングストンに向かい、途中で左に折れて大地を降りていく。気候はだんだん乾燥し、眼前にカリバ湖が現れた。長さ 280km、最大幅 32km という巨大な人造湖だ。ジンバブエとの国境はこの湖の中央を通る。この湖は、1959 年に完成したカリバダムによりザンベジ川がせき止められてできた。湖底に沈んだ土地から周辺の高台に移住を強いられた人々は 5 万人に上ったといわれる。

農民に話を聞くと、2004/05 年のメイズの収穫はゼロだったという。この辺りの年間降水量は 600mm 前後である。メイズを作るには限界的な雨量であり、旱魃のリスクは非常に高い。このようなリスクの高い土地で、人々はなぜメイズを作り続けるのだろうか？かつてはメイズより乾燥に強い雑穀（ヒエやモロコシ）も栽培していたらしいが、現在で

はそれらの生産量は非常に少なくなっている。また、政府や援助機関は救荒作物としてキャッサバの栽培の普及に努めているが、ほとんど成果はでていない。

メイズもキャッサバも中南米原産の作物であり、アフリカに伝わったのは大航海時代のことである。500 年の歳月は、人々の食生活を変えるには十分なのだろう。ザンビアは、1964 年に英国から独立して以来、わが国のコメと同様の地位をメイズに与えた。つまり、メイズを自給し、すべての国民がメイズを食べられるようにすることが、最も重要な政治目標の一つだったのである。社会主義的政策を実施していたザンビア政府は、化学肥料を廉価で配給し、高額メイズ生産者価格と逆ざやの卸売り、小売価格を公定した。このような政策の下では、農民がメイズ生産に特化するのとは当然のことである。この政策は、1994 年に構造調整政策を受け入れたことにより廃止された。しかし、一度作られた食生活の嗜好は、容易に変わらない。

しかも、現代において、旱魃のニュースはすぐさま世界中に知れ渡り、援助を業とする人々は素早く反応する。だから、主食のメイズの収穫が皆無でも、飢饉が起こることはめったにない。人々は援助がくることを前提に、あえてリスクの高いメイズを作り続けるとさえ考えられる。

こう考えると、高いリスクにさらされているカリバ湖岸の農民は、ザンビアの農業政策の犠牲者なのかも知れない。そう思いつつ町に戻ると、湖底に沈む前のザンベジ沿岸の民族誌をたまたま入手できた。これによると、リビングストンは、ビクトリア瀑布を発見したアフリカ横断（1855 年頃）の記録で、ザンベジ川流域の人々が川沿いの湿地でメイズやカボチャ、スイカなどを栽培していることを伝えている。さらに、1940 年代には、川から離れたブッシュの中に救荒作物としてキャッサバを栽培するように植民地政府が強制して、農民の不満と反発を招いたという。どうも、ザンベジ沿岸の人々はもともとキャッサバが嫌いなようだ。ヒエやモロコシにリスクを分散するくらいなら、援助に期待するほうがましということなのだろうか？